

# 経済学史の意義とその方法(完)

上野俊樹

## 目次

- 一 認識の発展の動力  
(以上、『立命館経済学』第二十七卷第一号、第三十卷第一号)
- 二 経済学史の研究の意義
- 三 宇野説における経済学史の考え方  
(以上、『立命館経済学』第三十卷第三・四・五号)
- 四 イデオロギーとは何か
  - 1 史的唯物論の定式におけるイデオロギー
  - 2 物質的社会関係とイデオロギー的社会関係
  - 3 社会関係を反映する意識としてのイデオロギー
  - 4 実践的意識としてのイデオロギー
    - (イ) イデオロギーの起源である実践的意識
    - (ロ) 「幻想的意識」を根源とする宗教的イデオロギー
    - (ハ) 実践的な行為を導く意識としてのイデオロギー
  - 5 自らの発生根拠を知らない意識としてのイデオロギー

6 階級社会の発生と階級的イデオロギー

- (イ) 階級的イデオロギー一般
  - (ロ) 国家とイデオロギー
  - (ハ) 社会関係の「物化」と支配階級のイデオロギー
  - (ニ) 階級闘争とイデオロギーの分裂
- おわりに（完）

#### 四 イデオロギーとは何か

##### 1 史的唯物論の定式におけるイデオロギー

経済学史は経済思想史とどう違うのか、したがってまた科学（史）とイデオロギー（史）——思想（史）——はどう違うのか。このことが本稿で検討すべき一つの課題であるのだが、このためにはイデオロギーとは一体何かということがイデオロギーの実体的規定と機能的規定の両側面から明らかにされねばならない。本稿では、イデオロギーの実体的規定に限定して論じることとする。この実体的規定は概略的にいえば、イデオロギーの起源としての実践的意識に一定の形態規定を加えて与えられたイデオロギーの抽象的規定のことであり、さらに階級的イデオロギーとしては、この抽象的一般的規定に階級的形態規定を加えて与えられる。

人間の認識はその総体としてはイデオロギー的認識の地盤と科学的認識の地盤という二重の次元の異なる地盤から形成される認識からなっている——人間の認識が二重の、次元の異なる地盤から構成されていることを明確

に指摘したのはフランスのルイ・アルチュセールの大きな功績である（アルチュセールのイデオロギー論の批判的検討とあわせて、イデオロギーの機能的規定の側面については近刊予定の拙著『経済学とイデオロギー』を参照されたい）。

特定の人間集団の認識あるいは個々人の認識は、イデオロギー的な認識と科学的認識の相互作用のなかで形成されている側面と同時に、それぞれが一定の相対的自立性を保持している側面との総体からなっている。

それでは科学的認識と区別されるイデオロギー的認識の実体的規定とは何であるのか。これをするためには「イデオロギー」とは何かということをしらなければならない。しかし、レーニンが上部構造をイデオロギー的  
社会関係と述べているように、イデオロギーは同時にイデオロギー的社会関係であって、したがってイデオロギーを全面的に明らかにするためには全上部構造の分析が必要とされる。しかし、ここでこうしたことをすべておこなうことはとても無理な話なので、問題を個人や集団が客観的世界を認識する時に作用しているイデオロギー的認識の側面であるイデオロギーの実体的規定の研究に限定して叙述を展開したいと思う。

マルクスは『経済学批判・序言』のなかで有名な史的唯物論の定式を与えている。まず最初にこの定式を足がかりにして、「イデオロギー的認識」とは何かを考えてみたい。この定式の意味を理解するために、これを便宜的に区分して引用する。

「私の研究にとって導きの糸として役だった一般的結論は、簡単にいえば次のように定式化することができる。  
(1)人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいる。これらの生産諸関係の総体は、社会的経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、その上に一つの法律的および政治的上部構造がそびえ立ち、

そしてそれに一定の社会的意識諸形態が対応する。(2)物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。(3)人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。(4)社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それらがそれまでその内部で運動してきた既存の生産諸関係と、あるいはその法律的表现にすぎないものである所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。そのときに社会革命の時期が始まる。経済的基礎の変化とともに、巨大な上部構造全体が、あるいは徐々に、あるいは急激にくつがえる。このような諸変革の考察にあたっては、経済的生産条件における物質的な、自然科学的に正確に確認できる変革と、それで人間がこの衝突を意識するようになり、これとたたかって決着をつけるところの法律的な、政治的な、宗教的な、芸術的または哲学的な諸形態、簡単にいえばイデオロギー諸形態とをつねに区別しなければならぬ」（引用文中の(1)〜(4)までの番号は筆者が挿入したものである——『経済学批判・序言』、邦訳『マルクス・エンゲルス全集』第一三卷六一七ページ。以下においては、マルクス、エンゲルスからの引用で、『マルクス・エンゲルス全集』からのものは『全集』と略記する）。

この史的唯物論の定式の(1)の部分で、社会が土台と上部構造に区分され、さらに法律のおよび政治的上部構造に対応するものとしてそれらと区別されて社会的意識諸形態のことが述べられている。この社会的意識諸形態が同時に上部構造であるということは、この定式の(4)の後半部分で「法律的な、政治的な、宗教的な、芸術的または哲学的な諸形態、簡単にいえばイデオロギー諸形態」と述べられていることから明らかである。つまり、上部構造が法律的、政治的上部構造と社会的意識形態に二分されているのである。そして、社会的意識諸形態はイ

デオロギー諸形態といいかえられている。

社会的意識諸形態、すなわちデオロギー諸形態は定式の(1)の部分では狭い意味で、法律的、政治的上部構造と区分される宗教的、芸術的、哲学的諸形態としていわれており、定式の(4)の部分では広い意味で全上部構造をさすものとしてつかわれている。

マルクスがその一部分を執筆し、マルクスとの討論をへて出版された『反デュリング論』において、エンゲルスはこの史的唯物論の定式を次のようにいいかえている。

「これまでのすべての歴史は、原始状態を別にすれば、階級闘争の歴史であったということ、これらのたがいなたたかひあう社会階級は、いつもその時代の生産関係と交易関係との関係、一言でいえば経済的諸関係の産物であるということ、したがって、社会のそのときどきの経済構造が現実の土台をなしているのであって、それぞれの歴史の時期の法のおよび政治的諸制度や宗教的、哲学的その他の見解からなっている上部構造の全体は、究極においてこの土台から説明されるべきものであるということが明らかになった」(『空想から科学への社会主義の発展』、『全集』第一九卷、二〇五ページ)。

ここで注目すべき第一のことは上部構造が制度(Einrichtung)と見解(Vorstellung)との二つに区分されていることである。史的唯物論の定式の(4)の部分にみられるデオロギー諸形態の法律的な形態と政治的な形態がここでは法律的制度と政治的制度といいかえられている。だから、法律的制度(法律的关系)あるいは政治的制度的(政治的關係)といえば、それは一定の法律的意識(觀念)や政治的意識(觀念)と切り離して考えられるべきではなく、制度というのはそれを必然的にとりまわっている意識(觀念)を含めて考えられるべきなのである。しかし、

法律的な制度や政治的な制度が制度としてあるかぎりでは、宗教的、芸術的あるいは哲学的な諸形態と区別されるが、この区別も相対的である。なぜなら、宗教的形態は制度あるいは社会関係としての教会や宗教団体を持ち、また芸術的形態も制度としての一定の組織(芸術家団体、劇団、オーケストラ等々)をもつからである。ただ哲学的形態はマルクスが『ブリュメール一八日』でいう「さまざまに違った、独特の形態をもった感覚、幻想、考え方、人生観からなる上部構造」(『全集』第八卷、一三二ページ)のことであり、一般的にいえば世界観のことである。もちろん、一定の制度・社会関係(たとえば、教会)と結びついて特殊の世界観が生み出されるのであるが、このマルクスの文章は特定の制度と結合した世界観について述べているのではなく、純粹の世界観そのものについて、すなわち純粹のイデオロギー、社会的意識形態について述べている。エンゲルスが上部構造を制度と觀念に区分して述べているのは、制度をもたない法律的形態や政治的形態は考えられないのに対して、宗教的形態や芸術的形態の場合には制度をとまわらない純粹のイデオロギーとしてもありうるからであろう。

以上のように私は社会的意識諸形態をイデオロギーと同意義に理解し、さらにイデオロギーを広い意味では社会関係(制度)を含んだものとして、狭い意味では社会関係(制度)を含まないものとして理解する。戸坂潤もこういう理解である(『イデオロギー概論』、『戸坂潤全集』第二卷、一〇五ページ)。

## 2 物質的社会関係とイデオロギー的社会関係

1で示した私の見解は、土台と上部構造を「物質的社会関係とイデオロギー的社会関係」として理解するレーニンの考え方と一致していると思う。レーニンは次のようにいう。

「社会関係は物質的關係とイデオロギー的關係に分けられるということであった。この後者は前者の上部構造にすぎず、そして、前者は、自己の生存をめざす人間の活動の（結果）形態として、人間の意志や意識とは別個に形成されるのである」（『人民の友とは何か』、邦訳『レーニン全集』第一巻、一四五ページ）。

そして、レーニンはこの物質的社會關係について、「人間の意識を通過しないで形成される關係——人間は生産物を交換することによって生産關係にはいりこむが、ここに社会的生産關係があることを意識さえないで、そうするのである」（同前、一三三ページ）といい、イデオロギー的社會關係について、「形成されるまえに人間の意識を通過する關係」（同前）といっている。史的唯物論にいう上部構造をレーニンがいうように「イデオロギー的社會關係」として把握することによって、マルクスやエンゲルスの上部構造についての諸説明を統一的に理解することができるようになる。この意味でこのカテゴリーは重要である。

この点について、社會關係の一形態であり、人類の最初の上部構造的社會關係であつた家族關係を例にとつてたちいって検討してみたい。

人類と人類社會は家族をもたない、乱婚のおこなわれている群れ、すなわち「原始的群団」（レーニンからア・エム・ゴリキエーへの手紙、邦訳『レーニン全集』第三十五卷、一二五ページ）から生まれだつた。この原始的群団（原始群）は、「社会的なもの」と生物的なものとの闘争が行なわれ、社会的なものによつて生物的なものを抑制する過程が経過する場としての結合体」（ユ・イ・セミョーノフ、『人類社會の形成』、法政大學出版局、上卷八ページ）であり、この原始的群団のなかで動物的個體主義が抑制されるとともに、形成されつつある人類と人類社會は形成された人類と人類社會に転化していく。

セミヨーノフによれば、「前人群」から「形成されつつある人類社会(原人群)」をへて「形成された人類社会」ができあがる。形成された人類社会は目的意識的な労働によって自然と人間を媒介する生産有機体——経済的社会構成体である。たんなる動物の群れ(自然的、生物的關係にもとづく群れ)から経済的社会構成体への道程は紆余曲折の多い、袋小路にしばしばおちいった困難な過程であったが、この過程を貫ぬく法則は生産關係、社会關係を形成することによって動物の群れにすぎなかった前人が人類になったということである。人類の形成は人類社会の形成と同時平行的な過程であったわけである。そして、生産を發展させるなかで人類は自然および社会の法則性を認識するようになる。

また、人類は長い原始群の時代を通じてその最初の経済的社会關係、生産關係を共同的な(原始共產主義的)な生産關係として形成するのであるが、こうした土台における共同的な生産關係に照応した上部構造をもつことによって人類は基本的に原始群の時代に別れをつけることになる。

上部構造は土台としての生産關係に規定されているが、土台が土台としての意味をもつのは上部構造を生み出すことによってそうなるわけである。原始群は生産活動を通してのみ人類になるのであるから、この意味で生産における人々の關係が基本的ではあるが、しかしこうした経済的社會關係は上部構造を分離するにつれてますますその独自性をもって發展していくわけであり、この意味で土台に照応した上部構造の形成は同時に土台の形成過程でもあった。人類は原始群から成長して人類になった時には、土台である共同的な経済的社會關係と上部構造的社會關係とそうした社會關係についての意識をもち、さらに一定の社會關係のもとで人間が働きかける自然についての、一定の社會關係に制約された意識をもっていたのである。この上部構造的社會關係の最初のものは、



マルクスによって血族（血縁婚）家族として把握されている。

「血族家族によつてしめされた社会状態がダーウィン……とははんたいに、先行している乱婚的交婚の状態をしめしている。群が生活手段のために、より小さな諸集団に分解せざるをえなくなると、群は、乱婚から血族家族にならなければならなかったが、血族家族は最初の『組織された社会形態』である」（布村一夫訳『古代社会ノト』、未来社、二三一ページ）。

ここでは、家族形態の発展について展開することが主要な課題ではないので、これ以上家族形態の発展の詳細にはふれないが、私がこれについて触れたのは、マルクスやエンゲルス、あるいは前述したセミョーノフもいずれも最初の組織された社会的形態として家族関係をあげているということ、およびそうした家族関係が人類の実践的意識を媒介として形成されたということをいいたためである。

人類は本質的に生産活動の発展と矛盾する乱婚的状态に示される性本能にもとづく動物的個体主義を社会関係——家族関係の形成にもとづく社会関係——によって抑制した場合にのみ人類になったのであるが、この社会関係は性タブーのような道德的意識——その一つの形態が外婚タブーである（セミョーノフ、前掲書下巻、三二一ページ）——を形成し、そうした意識上の外的強制をともないつつ形成されていくのである。

以上のことをエンゲルスの『家族、私有財産および国家の起源』（以下、『起源』と略記する）において確認してみよう。<sup>(注)</sup>

(注) エンゲルスの『起源』では、家族は集団婚（血縁婚家族↓プナルア家族）↓対偶婚家族↓個別婚というように発展すると叙述されており、エンゲルスは最初の家族形態である血縁婚家族の時代をすでに形成された人類社会、原始共

同体的な社会としてみているようである。これにたいしてセミヨノフは、エンゲルスのいう対偶婚家族の時代を同時に氏族制度の社会とみ、この社会でもって人類は形成された人類（社会）になり、原始共同体社会は氏族制度の社会からはじまると考えているようである。

エンゲルスによれば、原始的群団は乱婚状態からぬけ出ると血縁婚家族——親の世代と子の世代の婚姻は禁止されるが、同じ世代に属する人々は乱婚状態にある——に移行する。そして、この血縁婚家族はモーガンのいうプナルア家族——親と子の結婚の禁止に加えて兄弟と姉妹の間の結婚を禁止する家族形態——に移行する。そしてこのプナルア家族はさらに発展して対偶婚家族——長短さまざまな期間、ある程度の固定性のある対偶関係をもった婚姻関係にもとづく家族形態——に移行する。

こうした集団婚家族（血縁婚家族とプナルア家族）および対偶婚家族は、原始的群団からぬけ出て最初の人類社会となった原始共同体的社会の共同的な生産関係に照応した家族関係であり、原始共同体的社会関係・生産関係の内部での生産力の発展が同時に経済単位でもあった家族形態を集団婚家族から対偶婚家族へと発展させたのであった。

乱婚の禁止すなわち近親間の婚姻の禁止は、それ自体一つの生産力の要素である人間労働力をそれ以前の時期に較べてより頑健でより生産性の高いものとし、また集団内部での新しい生命の生産能力を高め、より健康な労働能力の比率を高めた。原始的社会の集団内部での近親間の婚姻の禁止される範囲が広がるにつれてますますこういうことがいえるのである。

しかし、乱婚の禁止のもたらす効果は数多くの世代の交代をへてようやく意識のうえで明確になる事柄である。

「近親生殖を防ぐとする衝動がくりかえしくりかえし現われていること、ただそれが目的をはっきり意識することなしに、まったく自然発生的に、暗中模索的になされていること」(エンゲルス『起源』、『全集』第二巻、五〇ページ)というのが乱婚の禁止にふみ出すまでの事態の真相である。ここからうかがえることは、全般的な乱婚の禁止したがって「最初の組織された社会形態」である血縁婚家族への移行が意識をとおして、たんなる個人的意識をとおしてではなく、原始的集団がその生活と生産の行為を幾世代となくくり返すことによって一つの集団的な意識に転化した社会的意識をとおしておこなわれたということである。この社会的意識はやがて、いわば原初的な法である「掟」あるいは最初の道徳的意識形態である「道徳的タブー」として人類の原始的集団を実践的に拘束することになる。そして、この最初の家族形態である集団婚は原始的群団からぬけ出したばかりの原初的な人類社会の生産関係と生産力にふさわしいものであった。

以上のように、原始共同体的生産関係は上部構造である最初の組織された社会的形態である家族関係とそれに関する社会的意識を生み出す。そして、この上部構造的関係はレーニンのいうように人間の意識を通して形成される関係、すなわちイデオロギー的社会関係である。私は、社会的意識および社会的制度・関係を含んだ上部構造的社會關係をイデオロギーの第一規定と考える。これは1節でのべた、広い意味でのイデオロギー概念である。こうしたイデオロギー的社會關係に対応するのが物質的社會關係である。ここで簡単に物質的社會關係について述べておく。物質的生產關係の一つである資本主義的生產關係は、ある社會の生産力が一定の發展段階に達すると、世界の各地において封建的生產關係を否定して出現するのであり、この出現の過程は世界の各地に住む人が「封建制の次は資本制にしよう」というような相談をあらかじめしておいたうえでおこなわれる過程ではな

い。鎖国をしていた日本においても、明治維新の結果、資本主義的生産関係が生まれ得るのである。同様に人類はその生産活動において性タブーのような社会的意識すなわちイデオロギーを形成しなくても最初から、共同的な関係において自然に立ちむかうのであり、この生産における共同的关系は形成された初期の人類社会においては、原始共同体的な生産関係として形成される。これが物質的生産関係の意味である。

以上の1、2節をまとめれば、イデオロギーとは上部構造であり、かつイデオロギー的社会関係である。これがイデオロギーの第一規定である。

### 3 社会関係を反映する意識としてのイデオロギー

1節でとりあげたエンゲルスの『反デューリング論』(『空想より科学へ』)の文章(二九ページ)でもう一つ注目すべきことは次のことである。エンゲルスはこの文章で狭い意味でのイデオロギーを、「宗教的、哲学的その他の観念」と述べており、マルクスの史的唯物論の定式にみられる「芸術的形態」がここでははずされていることである。これがどういう意味をもつかということがここでの一つの問題である。

さらに、マルクスの史的唯物論の定式においては、(2)の部分で「精神的生活過程」のことがいわれており、これは一般的に解すれば芸術的活動、宗教的活動等々(あるいはこうした活動を含む生活過程)と並んで科学的活動が含まれていると考えられる。しかし、それにもかかわらず、史的唯物論の定式の(4)の部分のイデオロギー諸形態には科学的形態は含まれていない。こうした問題をどう考えるのがここでのもう一つの課題である。

マルクス主義的唯物論では、科学や芸術や文学の真理性や価値はそれが客観的現実、すなわち自然と社会を反

映するという点に求める。ここで大切なことは反映すべき対象が自然と社会（関係）の二つに別れているのであって、反映論を史的唯物論との関係で論じる場合には人間の意識が反映（模写）すべき対象が二つあるということとを忘れてはならない。なぜなら、史的唯物論でいう上部構造は社会関係（制度）と社会的意識諸形態であって、イデオロギー諸形態が客観的現実を反映しているかどうかを問題にする場合に、反映すべき対象は社会（関係）に限定されているからである。したがって、人間の意識が反映する活動や活動の所産が社会に反映しているかぎりにおいては、そうした活動を反映する意識はイデオロギーである。

社会関係や社会的意識諸形態を対象とする社会科学はイデオロギーの側面をもつ（この点については後述する）のであり、人間の社会的な相互関係、相互交渉あるいはそこから生まれてくる人間の諸行為——喜怒哀楽等——を表現するかぎりにおいては、文学や絵画・音楽等々の芸術、また人間の社会関係を幻想的に表現する宗教などはすべて社会的意識諸形態であり、イデオロギーである。

社会的意識諸形態がいくつかに分化する——階級対立を反映してイデオロギーが分裂するということではない——のは、社会関係が分化していること（それが重層的に存在していること）と、意識を表現する形式がいくつかに分化していることによる。人間の意識が客観的現実を反映する形態は客観的存在である人間の感覚器官の特性——視覚、聴覚等——あるいは身体上の特性によって一面では規定されている。こうした感覚器官や身体上の特性に対応して、絵画、造形美術、音楽や舞踊などが生み出され、それらが社会関係を反映し、表現するかぎりにおいては芸術的イデオロギーとなる。

しかし、人間の意識はもう一つの客観的現実である自然をも反映する。動物や植物を表現する絵画や彫刻など

の造形美術、あるいは分析的、論理的思考によって自然の法則性を把握する自然科学などがそうである。いろいろの形態での人間の自然にたいする認識は、時代を遡るのぼればのぼるほど、また生産力と社会の発展が低ければ低いほど、社会関係によって制約されている。古代の遺跡である洞窟に描かれている動物の絵は絵を描くこと自体が目的であるというよりも、絵という一つの人間意識の反映形式を通じた人間の社会関係の表現である。こうした芸術的意識(あるいはその萌芽)は自然を描写するなかで、自分たちの社会関係を表現しているものであり、この意味でこうした自然認識それ自体が一つのイデオロギーである。数学についてもある程度このことがいえる(戸坂潤 前掲書、一三九—一四一ページ参照)。したがって、イデオロギーに制約された自然認識は必然的に社会関係に反作用するのである。自然にたいする人間の認識は人間社会と生産力の発達段階が低ければ低いほど、人間の社会関係に関する意識すなわちイデオロギーを通して認識される。いいかえれば、人間社会が発達する度合に応じて、ますます人間は社会関係についての意識であるイデオロギー的制約からだんだんとまぬがれて自然を科学や芸術(社会関係を反映しない芸術の発展)によって人間意識に反映するようになる。

そうした事情について、ジョージ・トムソンは次のようにいう。

「未開人の意識では、……自然は社会と同一視されているが、それは自然が生産労働を通じて、社会関係のなかに引き込まれた範囲だけしか認識されないからである。すなわち、その生産労働が、いまだ低い発展段階にあるがために、人間と自然との関係をも人間相互の関係をも制限しているからである」(『最初の哲学者たち』、岩波書店、九八ページ)。

資本主義的生産様式のように生産力がかなり高度に発展した段階においては、自然科学的認識の所産、すなわ

ち発見された自然法則は社会科学的法則を認める場合とは異って、その社会関係の相違（根本的には階級的立場の相違）にかかわらず真理として認められねばならないということは相対的には自明のこととなっているし、またそうした自然科学的認識それ自体がイデオロギーとして現実の社会関係に反作用することは基本的にはない。同様のことは自然を反映する芸術的所産についてもいえるのである。

このような考察から明らかになることは、マルクスが史的唯物論の定式において芸術的諸形態をイデオロギー諸形態のなかに含めていることの意味は、すべての芸術的形態がイデオロギーであるということではない。私は社会関係を反映する芸術的諸形態のみがイデオロギーであると限定してマルクスの史的唯物論の定式を理解すべきであると考ええる。また、科学的認識活動は精神的生活過程に入るのであるが、自然科学的認識は一般的にはイデオロギーとはいえないのであるから、この点からみても、自然科学的認識を含む科学的認識一般はイデオロギーとしての上部構造に含まれないのである。したがって、史的唯物論の一般的定式としては『経済学批判・序言』のそれよりも、『反デューリング論』のエンゲルスの規定のほうがより包括的であると思う。

#### 4 実践的意識としてのイデオロギー

##### (1) イデオロギーの起源である実践的意識

人類が人類になるためには、動物的なものと人間的なもの（社会的なもの）が闘争している原始的群団のなかで、最終的に社会的なものが動物的個体主義を抑制することに成功しなければならなかった。この過程は二重である。つまり社会関係が動物的なものに勝利していく過程は同時に前人間的労働が人間的労働に転化していく過

程である。人類は自然的諸条件にたいするたんなる反射的行動にしかすぎない前人間の労働を、目的意識的な人間の労働に転化していくことによって人類となるのであり、そしてこの過程は人類社会の形成の過程でもあったのである。形成された人類は労働、生産的実践の過程で、自然および社会関係についての認識を集積していく。

自然支配力(生産力)や社会関係が発展するとともに、自然や社会関係の法則性についての認識が深まる。この過程は自然や社会を人間の意識に反映するための認識形態と認識したものを表現する形式を多様に分化させ発展させていく。この認識形態は科学的、芸術的、道德的、文学的等々の形態での現実の反映形式の分化となってあらわれてくる。これらの形式の分化・発展は人類とその社会の力強い発展という社会発展の肯定的側面を同時にあらわしている。

ところが、人類の初期の時代においては、はじめは自然の諸力がやがては社会的諸力も人類にとって、「同じように不可解なものとして、人間に対立し、外見上同じ自然必然性をもって人間を支配する」(エンゲルス、『反デューリング論』、『全集』第二〇巻、三二五ページ)ものとしてあらわれている。生産的実践による自然と社会にたいする人間の働きかけは、無数の実践のなかで自然と社会の法則性を人類に教えると同時に、「現実的実践活動の無力さ」(セミョーノフ、前掲書下巻、一三八ページ)を教えた。人間の自由とは要するに客観的世界の合法則性、その必然性に関する認識の豊かさに依存している。人類の認識の発展の低い歴史的段階においては、一方では人間は科学的形態や芸術的形態で客観的現実を人間意識に反映し、自然や社会にたいする認識を深めていきながら、他方ではその合法則性を認識できないがゆえに、盲目的な必然性に見える自然や社会の力のまえにひれ伏し、人間の実践活動の無力を感じるのである。自然法則や社会法則を洞察しえないことから生じる欲求の非実現は、人



間に観念のうえで無力さが克服され、欲求が実現されることをこいねがわせることになる。

こうして人間の意識は二分化されることになる。すなわち、一方では科学や芸術などのそれぞれの反映形式で客観的現実を反映する意識形態（科学的認識や芸術的認識あるいはそういうものの萌芽形態）が生み出され、他方では客観的現実を想像上の姿（幻想的形態）においてつかまえる意識が生み出される。この後者がセミョーノフのいう「思惟の幻想的、呪術的形態」（前掲書下巻、第二章）である。

人間の実践的な意識を「幻想的、呪術的形態」とその他の意識形態に分化して考える考え方はセミョーノフの非常にすぐれた点であると思う。その理由はこうである。意識の幻想的、呪術的形態はさらに発展して宗教（的イデオロギー）に転化する。ところが、従来から宗教的イデオロギーをイデオロギーの典型的形態とみなす——このこと自体は正しいことである——ことによって、誤った見解が生まれてきた。すなわち、宗教的イデオロギーを幻想的な意識形態から生まれてくる「虚偽意識」とみ、この虚偽意識を全面的な虚偽とみる見解である。虚偽意識とのちにみるように「自らの発生根拠を知らないで一人歩きする意識」のことであり、けっして全面的な虚偽を意味するのではない。これが第一の誤り。こうした誤りのうえに、次に宗教的イデオロギーの特殊性がイデオロギーの一般性と理解される。これが第二の誤りである。この二つの誤りによってイデオロギーは全面的な虚偽を意味する「虚偽意識」であると誤り解されることとなった。したがって、この考え方はイデオロギーは誤った観念をもってする実践的意識ということになる。

しかし、イデオロギーとは社会関係を反映する実践的な意識である。宗教的イデオロギーもその萌芽の形態において、客観的現実をたいする実践的意識である「幻想的、呪術的意識」から発生したというセミョーノフの考

えがすぐれた示唆を与えるのである。

セミョーノフは人間の認識の二分化について次のようにいう。

「人類のかつての単一の真の現実的実践活動が、現実的活動と象徴的、寄生虫的活動へと二分化した結果、思惟的活動もまた、結果が真実である活動、論理的活動と、結果が幻想的世界観である非論理的活動・不合理的活動へと二分化することは避けられなかった」（同前、下巻、一四〇ページ）。

ここではセミョーノフは思惟形態の二分化を人類の実践的活動の二分化から、すなわち「論理的活動」——行為とその結果との関連を認識している活動——と、「非論理的活動」——この活動の結果どういふことが生じるかを認識していない活動——から説明している。思惟形態の区別を具体的な実践活動の区別から説明することの説明の方法は正しいと思われるのであるが、問題は、人類の實踐的活動が「論理的活動」と「非論理的活動」の二つに分化したことから思惟形態も「論理的思惟形態」と「幻想的、呪術的思惟形態」に分化したという説明である。この「論理的活動」は人類の無数の実践の結果、自然と社会の法則性のうちですでに認識しえたことを人類が実践する場合には、その行為は合目的であることを意味しているのであるが、しかしこうした合目的的行為が意識に反映され、また表現される形態は何も「論理的思惟形態」に限らないのである。社会関係の認識から生じる喜怒哀楽は音楽的形式やその他の芸術的形式で反映し表現しうるし、食料として有用な動物は絵画で描写されるし、部族や家族の人数の増大が生産力の発展の一つの要素であるといふことの認識は多産を願う造形的美術等によつても表現されるし、また近親結婚の有害な結果を知るとは性タブーのような道德的意識形態を生み出し、そうした形態で社会関係の法則性が認識され、表現される。もちろん、こうした芸術的認識や道德的認識の

基礎には論理的思考、あるいは悟性的、理性的認識があることはいうまでもないが、しかしそうした芸術的、道徳的認識を論理的思惟にのみ解消して理解することはできないのである。それらは論理的思惟を基礎にしつつも、それぞれの意識形態に独自の反映形式と表現形式をもって自然と社会の法則性をあらわすのであり、そしてひるがえってはそれらの意識形態は自然と社会に能動的、実践的に働きかけるのである。

だから、実践的意識をセミョーノフのように論理的思惟形態としての実践的意識と、非論理的な幻想的、呪術的思惟形態に二分化させて考えることは、宗教的イデオロギーとその他のイデオロギーの区別を考えるためには大切なことではあるが、同時にこの二つの区別だけでは、自然や社会を反映するイデオロギーの多様性を考えることはできない。人間の実践的意識は科学的、芸術的、道徳的、宗教的、政治的、法律的等々の形態で自然と社会を反映することによって形成される。3節でのべたように、これらの形態の実践的意識が社会関係を反映するかぎりでは、それらはいずれもイデオロギーである。すなわち科学的イデオロギー、芸術的イデオロギー、道徳的イデオロギー、宗教的イデオロギー、政治的イデオロギー、法律的イデオロギー等々である。このように人間の実践的意識としてのイデオロギーは多面的に分化しているわけであるから、セミョーノフの実践的意識を二分化するだけではイデオロギーの多様性を汲みつくすことはできないであろう。

(四) 「幻想的意識」を根源とする宗教的イデオロギー

エンゲルスは宗教が「不明瞭な意識」から発生したものであると次のようにのべている。

「しかしなお、ただ簡単に宗教について論じておこう。というのは、宗教は物質的生活から最も離れており、

そして最も縁遠いように見えるからである。宗教は、非常に原始的な時代に、人間が自分自身の本性と自分とをとりまく外的自然とについていだいていた不明瞭な、非常に原始的な諸観念 (milverständlichen, waldursprünglichen Vorstellungen) から発生したものである」(傍点は筆者——『フォイエルバッハ論』、『全集』第二巻、三〇八ページ)。

このエンゲルスの説明だけをみれば、エンゲルスは宗教的イデオロギーを全面的な虚偽と理解しているかのように見える。しかし、エンゲルスは別の所では次のようにのべている。

「黒人の物神礼拝、もしくはアリア人に共通した原始宗教のような、自然生的な宗教は、欺瞞がそのさいある役割を演じることなしに成立するにしても、その後発展するにつれて、祭司の虚構がまもなく避けられなくなるということは、わかりきったことである」(「ブルーノ・バウアーと原始キリスト教」、『全集』第一九巻、二九〇ページ)。

「古代のいっさいの宗教は、それぞれの部族の社会的、政治的状态のなから芽ばえて、それらと一体になった自然生的な部族宗教であり、また少し遅れては民族宗教であった。したがって、ひとたび、これらの宗教の基礎が破壊され、継承されてきた諸社会形態や、伝えられてきた政治制度や、民族的独立が打ちこわされると、それらに対応していた宗教も、いうまでもなく崩壊した」(同前、二九五—二九六ページ)。

このあとのほうの二つの引用文においては、原始的宗教が成立する場合に、「欺瞞が役割を演ずることなしに成立する」と述べられ、またそれらが、「諸社会制度や政治制度に照応していた」と述べられている。ところが、『フォイエルバッハ論』では宗教は「不明瞭な非常に原始的な諸観念から発生した」と述べられている。従来のが国の翻訳において、この傍点をふった「不明瞭な (milverständlich)」は大月書店の『全集版』、『国民文庫版』

あるいは『岩波文庫版』も「誤った」と訳されている。この翻訳は語学としては間違っていないが、宗教的イデオロギーの本質を考えるうえで正確ではない。これを「誤った」と翻訳するのは宗教的イデオロギーを先験的に「虚偽意識」、しかも、全面的に虚偽の意識と決めてかかっているのである（「虚偽意識」の正確な意味については次節を参照されたい）。しかし、このように先験的に理解し、「誤った」と訳してしまうと、この文章と「ブルーノ・バウアーと原始キリスト教」でエンゲルスが述べている「原始的宗教が客観的実在に照応する」という趣旨の文章とは明らかに食違うこととなる。mitverständlich は「不明瞭な」と訳すべきであり、こう訳してこそ『フォイエルバッハ論』で述べられていることと「ブルーノ・バウアーと原始的キリスト教」で述べられていることとは食違わなくなる。これを前提として理解したうえで、以下に宗教的イデオロギーを考察する。

原始的宗教は生産力の非常に低い段階における人間の自然と社会にたいする「実践的無力感」の表明である。階級対立の発生していない原始的社会においては、共同体成員はすべて生産的实践に参加しており、彼らの意識はこの生産的实践を媒介として社会と自然に結びつけられている。あらゆる意識の根源はセミョーノフのいうように実践的活動をとおして知ることのできる客観的実在にあるのだから、生産的实践をおこなっている共同体の成員の認識が生産的实践を媒介として知りうる社会と自然に関する認識——その認識のレベルがどのような水準にあるとも——から離れて、その発生の当初において、「自立的な存在としての思想との取り組み」をすることはありえない。階級社会の場合は事情は別であって、階級社会の精神的労働が生産するイデオロギーは「自立的な存在としての思想との取り組み」である。したがって、原始的宗教の発生は与えられた観念材料の加工からではなく彼らの認識の限界から生じる「実践的無力感」に帰因するのである。こうした「実践的無力感」が人

間に人間を支配する外的な自然のおよび社会的な諸力を「空想的に反映」させるのであり、宗教あるいは宗教的感情はそうした力にたいする「人間のふるまいの直接的な、すなわち情緒的な形態」（『反デューリング論』、『全集』第二〇巻、三三五ページ）である。幻想的な意識の産物である原始的な宗教的イデオロギーの形態で初期の人類は彼らの実践的規範意識を表明していたのである。そしてこうした宗教的イデオロギーは空想であり、幻想であり、その意味で「不明瞭な観念」ではあるが、それが彼らの客観的諸条件から生じる現実的な実践意識と対になった「実践的無力感」であるのだから、原始的な宗教的イデオロギーのなかに反映している見解はけっして「不明瞭な観念の一人歩き」のみによって形成されているのではなく、むしろ現実的な生産的实践によって知りえた事実——客観的实在の相対的に正確な反映——が幻想的反映と共存しているのである。

以上のことから、*mibverständlich* は「不明瞭な」と訳すことが正しいと思われる。前述の一見すれば食違いとみえることは、一つにはこの翻訳の問題であり、もう一つはこの翻訳の原因でもあり、結果でもあるのだが、「虚偽意識」を「全面的に誤った意識」と考えることにある。しかしこの後者については5節で述べる。

だから次のエンゲルスの文章も階級的イデオロギーである宗教について述べていると考える。

「社会がいつさいの生産手段を掌握しそれを計画的に運用することによって、自分自身とその全成員とを、現在この生産手段——彼ら自身で生産したものでありながら、優越する外的な力として彼らに対立しているところの——によって彼らがおとし入れられている隷属状態から解放するとき、したがって、人間がもはや事を計画するだけではなく事の成否をも決するようになるとき、そのときはじめて、いまなお宗教に反映されている最後の外的な力が消滅し、それとともに宗教的反映そのものも消滅する。それは、そのときはもう反映すべきなものな

という、簡単な理由によるのである」(同前、三三六ページ)。

原初の無階級社会では人間の自然および社会にたいする認識が制限性をもっていたことが宗教の根源であるが、階級社会ではさらにこれに加えて階級対立による社会的な意味での苦悩が宗教と宗教的な感情のもう一つの根源となる。したがって、階級対立に起因するところの人間の社会的苦悩がとり除かれたとしても、相変らず人間の認識は相対的制限性をもっているわけであり、このことから一定の社会的な苦悩が発生する余地があるだろうし、また人間の自然(生物体としての人間の肉体的存在)が有限であるということは社会関係のなかで生きている人間に、一定の喜びや悲しみの感情を生み出す。動物は社会、したがって、社会的な意識をもたないのだから、動物個体の消滅(死)を群れの悲しみとして感じることはない。原生的共同体における自然や社会にたいする認識が低いため生じる「実践的無力感」が人間にその目的、希望をその幻想的思惟形態で表現させ、ここから宗教的イデオロギーが発生したのであるが、それと同時に人間の肉体の有限性(すなわちその死)にたいする諦観が自然や社会にたいする認識の制限性から発生する「実践的無力感」と融合して宗教的イデオロギーとして表明されたということにも注意を払わなければならない。

宮本顕治氏はいわゆる「創共協定」が結ばれた頃に、それに関連した論文のなかで「共產主義社会での宗教」について次のような注目すべき見解を述べられている。

「いわゆる『社会悪』が排除され、そこからの苦悩が生じない段階にあっても、人間社会であるかぎり、悦びだけでなく、病氣、恋愛、結婚、家庭、自分の資質や才能についての希望と現実、人間の寿命その他、あれこれの人間関係での人間の苦しみや悩みがなくなるものでないこともあきらかである。その点では、そういう人間生

命の限界や個々人の能力の問題にかんしての、また人間の苦悩がつづくかぎり、その中での人間精神の充実をはかる精神的な活動が、人間の遺産の一つとしての宗教として継続される場合、何人もそれを禁止しただけでなく、自由な人間関係の社会の自由な活動の一分野として保証されるだろう」（歴史の転換点に立って——科学的社会主義と宗教の接点——、『文芸春秋』一九七五年一〇月号、一〇八ページ）。

宮本氏がここでいわれている人間の苦しみや悩みというものは、現実的な事柄であり、そうした現実的な問題を意識のうえで、すなわち宗教的意識形態において——場合によって幻想として——解決する、あるいは棚上げすることによって、人間がその生活をつづけるということは、イデオロギーの一つの特色をよくあらわしている。この場合のイデオロギーは、実践的意識の一つの形態である「幻想的意識」によって把握された実践的行為を導く意識なのであり、階級的イデオロギーではない。この宗教的イデオロギーは実践的行為を導く意識であるという意味でのイデオロギーであるが、実践的行為を導く意識という規定についてはもっと一般的に考察してみる必要があるだろう。

(ハ) 実践的な行為を導く意識としてのイデオロギー

宗教的イデオロギー以外の実践的意識であるいくつかのイデオロギー——芸術的、哲学的、道徳的、法律的、政治的イデオロギー等々——を含めて、イデオロギーが実践的な行為を導く意識であるということをもっと一般化して考えてみよう。そこで日常的行為をも含めた実践にたいする規範あるいは意識とは一体人間の社会生活においてどんな意義をもち、どんな役割を果すかということについて述べておきたい。この点での私の叙述はルイ



・アルチュセールに学んだことが多いということをあらかじめ述べておこう。

そもそも人間は、一定の社会関係、社会制度のなかでこそ一個の人間として生まれ、育てられ、成長するのであるが、しかし自らがそのなかで生活する社会関係・社会制度を多くの場合、自由に選択することはできない。とくに、基本的な社会関係については全くそうである。誰れも自分が自由意志で任意にお好みの時代の特殊な生産関係と特殊な階級を選択して生まれ成長することはできないし、また特殊な民族、特殊な国家、特殊な家族制度とそのなかのある特定の家族等々を自由意志で選ぶことはできない。人間は自己の意志にかかわりなく、ある時代の経済的社会関係をその基礎としているいくつかの重層的な構造をなして存在している社会のある部分に生まれおちて成長する。そしてこの社会諸関係は少くとも今日の資本主義社会に至るまでは、歴史が進むにつれてだんだんと複雑な重層的な構造をもって発展してきた。

人間は人間として成長するためには、その成長の過程を通して、自己の経験と親(家族)や社会の教育によってこの社会的諸関係を受容し、その社会関係のなかで一個の主体として生活することを学ばなければならない。幼少期においては、社会関係のなかで生きるための基礎的技術(素養)として、話すこと、書くこと、計算すること、あるいはまた一定の集団のなかでの他人との関係のとり結び方、さらにはまた人間的な感覚器官の形成——美的感覚、味覚等々——、時代が古くなれば親や家族の世襲とされる職業の修得(あるいは修得のための基礎的技術)など多くのことを学ぶ。ある時代において、ある民族にとって、ある階級にとって、というように事情はいくつもの組合せが考えられるのであるが、そうした事情のもとで、人間は人間的に生きるうえですくなくとも必要なことを経験と教育とによって修得しながら成長し、ある社会関係のなかで主体として生きられるように

なるのである。時代を遡のぼればのぼるほど、経験すべきことと教育されるべきことは量的には少くなるが、しかし、原始的な氏族社会から今日の資本主義社会まで人間がこうした社会的諸関係を経験および教育と学習によって知り、そこで生きていける能力を身につけなければならぬという事情はどの社会においてもかわりはない。人間は社会的諸関係のなかで生きる術をたんに本のうえて知るのではなく、幼少期から人生という坩堝のなかで、幾多の喜怒哀楽をともなつた試練を経験しながら知るようになるのである。しかし、自己をとりまく幾重もの社会的諸関係がそのようにあつて、なぜそれ以外のものではないのか、ということについては、大部分の人々は知らないのである。今日の資本主義社会で、自分がもつとも身近に感じる家族でさえも、人々はなぜ今日の家族が単婚家族（一夫一婦婚）なのかを知らないし、そればかりでなく、過去にそれと異なる婚姻形態があつたなどとは全く意識もしていない。ここで大部分というのは、マルクスによつて史的唯物論が発見され、それが科学的認識として与えられている今日でさえも階級闘争のなかでマルクスの発見を学ぶ必要を感じ、実際に学んだ人々は少数にとどまっているということである。

しかし、そういうことを知らなくとも、人々は自己をとりまく幾重もの社会的諸関係・諸制度のなかで生きていけるし、生きていけるのである。つまり、人々は経験と教育および学習によつて、實際的に与えられたものとして存在する、一定の社会関係のなかで生きるための実践的知識を身につけるのである。

ある個人がもつ宗教的イデオロギーは、個人的な感情や情緒としてその個人が自分でつくり出すのではない。社会的意識として広汎に存在する宗教的イデオロギー、宗教的諸制度（教会、寺院、神社等々）、宗教的諸関係のもので生きる人々（神官、僧侶、牧師等々）や宗教的諸制度の一般化としての社会的制度・儀式（葬儀、洗礼）などが

現実的に存在し、ある個人は自分がそうした現実において生活するなかで宗教的イデオロギーや宗教的諸関係の由来を知ることなく、宗教的イデオロギーを身につけるのである。

一夫一婦制的結婚制度を前提とした儀式としての見合や結婚式は経済関係に規定されている道徳的イデオロギーとイデオロギー的社會關係である單婚家族制度の由来を知らないままに實踐的に人々がおこなう行為である。しかし、その由来を知らなくてもこの行為を人々は一定のイデオロギーのもとでおこなうのである。

このように、イデオロギーとはまさに人々あるいは人々の集團がある時代の、ある社會的諸關係のなかで經驗と教育によつて學んだ社會生活を生きるうえでの實踐的意識なのである。したがつて、イデオロギーとはたんなる社會心理とは異つてゐるし、どんな社會においても人々や人々の集團はたんなる社會心理では生きることはできない。前階級社會においても、人間は一定の社會關係のなかで相互に働きかけうるためには、社會法則に基本的に規定される實踐的行為規範——性タブー、一定の家族形態、ある宗教的イデオロギー等々——をつくり出さなideではないられない。たとへ前階級社會であつても、社會心理のように漠然としたものによつて、一定の社會秩序が保てるわけがないのであつて、實踐的規範としてのイデオロギーに違反する行為をするものはその社會的關係の外に追放されるほどの厳しい掟こそがイデオロギーである。われわれが分析によつてその具體的形態をはぎとつて抽象的なカテゴリーとして固定した、經濟關係や社會關係は現實にはイデオロギーを媒介として存在しており、イデオロギーによつてその關係の秩序が保たれているのである。

## 5 自らの發生根拠を知らない意識としてのイデオロギー

エンゲルスは前述した『フォイエルバッハ論』の「宗教が不明瞭な観念から発生する」という趣旨のことを述べた文章にすぐにつづけて、イデオロギーについて次のようにいう。

「ところが、どのイデオロギーも、ひとたび存在するようになると、あたえられた観念材料と結びついて、この観念材料をいっそう発展させるものである。そうでないなら、それはイデオロギーではないであろう。つまり、独立に発展した自分自身の法則だけにしたがう自立的な存在としての思想との取り組みではないであろう。こうした思想過程がその頭のなかで生じている人間には、自分の物質的生活の諸条件がけっきょくはこの過程の経過を規定するのだということは、必然的に意識されないうままである。というのは、もし意識されるなら、およそイデオロギー全体がおしまいになってしまふからである」（『フォイエルバッハ論』、『全集』第二一巻、三〇八ページ）。

この引用文にみられるように、ここでエンゲルスのいう各種のイデオロギーや宗教的イデオロギーは、「あたえられた観念材料と結びついて、この観念材料をいっそう発展させるもの」である。ここでいわれているイデオロギーは自らが物質的生活の諸条件に規定されながら、そのことを知らない意識、すなわち、「自らの発生根拠を知らないで一人歩きする思考、あるいは思考の体系」であり、虚偽意識としてのイデオロギーである。この場合の虚偽意識という意味は「誤った、非科学的な意識」という意味ではなく、その発生根拠を知らない意識という意味であり、これがイデオロギーの第四規定である。このイデオロギーの第四規定は階級社会の支配階級のイデオロギーに最もよく妥当するのであるが、無階級社会のイデオロギーや階級社会における直接的に階級的でない日常的な意識のなかにみられることである。あらゆる社会に存在する虚偽意識は、虚偽意識の第一形態である。これにたいして、階級社会に存在する虚偽意識は虚偽意識の第二形態である。

原始共同体社会においては伝統や習慣という形態をとった実践的イデオロギーによって、共同体の生産と生活が維持されるのであるが、そうしたイデオロギーを人々は経験や教育のなかで身につける。しかし、伝統や習慣は時間の経過とともにその発生の起源は忘却の彼方におし流されてしまう。だから、人々は自らが従う実践的規範の発生の起源を知らないで、しかもそれに従って行為するのである。それだけではない。伝えられて来た伝統や習慣に従って行為する後世の人々はその発生根拠を知らないままにそれを所与のものとして受けとめ、自らの生活や労働から生まれてくる新しい経験や認識を旧来の伝統や習慣につけ加え、それを修正したり複雑化したりして再び後世の人々に伝えていく。原始共同体の場合には人々は生産的实践から遊離していないのであるから、観念内部の材料でのみ旧来の伝統や習慣に加工を加えるのではない。だから、こうした加工が全くの思考の一人歩きとはいえないにしても、伝統や習慣の発生の起源を問題にし、現実との絶えざる照応関係によって成り立つ科学的思考からみれば、こうした加工はその発生の起源を問わないでそれを所与のものとして受けとめておこなわれるのであるから、やはり「自らの発生根拠を知らないで一人歩きする思考」としてのイデオロギーであるといわざるをえないであろう。

原始的宗教の場合には、それがいったん発生すればその根拠が幻想的意識形態にあるのだから、自らの発生根拠を知らないままに一人歩きするということが伝統や習慣などの実践的規範にくらべて顕著にみられることとなる。

科学的認識とイデオロギー的認識の区別はこの点において、すなわち科学的認識は自己の発生根拠を知っている——したがって社会関係に関する認識が自覚的な科学になるのはマルクスによる史的唯物論の発見以後である

——が、イデオロギー的認識は自己の発生根拠を知らないということにある。しかし、このことはイデオロギー的認識が全面的に非科学であり、全くの虚偽であるということの意味しているのではなく、イデオロギー的認識がそれ自体で自己の認識のどの部分が科学的でどの部分が非科学的かを判断することができないということである。なぜなら、ある認識が正しいか正しくないかは現実の事実によってのみ判断できるのであるから、自らの発生根拠を知らないイデオロギー的認識はこの判断をおこなえないのは当然である。

このことはいいかえればこうである。本質と現象が一致すれば、現象を分析して本質を発見する科学的認識は必要ではない。科学的認識は歴史のなかで「社会的生活の自然形態の固定性」（『資本論』第一巻第一分冊、一〇三ページ）をもって現象しているイデオロギー的な社会関係や経済的關係——歴史的發展の諸結果——を現実の道とは反対の道をたどって分析し、その本質を明らかにする。ところが、実践的意識としてはイデオロギー的認識は自然形態の固定性をもって存在している諸現象を所与のものとして受け取って、人々の行動を導くのであり、イデオロギー的認識は自らの発生の根源を探索しない。こうした点で、科学的認識とイデオロギー的認識の区別の一つが存在する。

しかし、区別だけではなく、両者の同一性をもみておく必要があるだろう。科学的認識も自然と社会にたいする実践的意識であるが、社会科学の認識は社会関係の本質を探り、それを反映することを任務とするのであるから、この点では（イデオロギー的な社会関係を反映するという点では）第二、第三規定のイデオロギーと同一性をもつのであり、この意味ではそれは科学的イデオロギーである。

同様に、芸術的、文学的等々の意識形態もそれが社会関係を反映するかぎりではイデオロギーであるが、他方

ではそれらはその基礎に論理的思惟をもつわけであり、この論理的思惟が働く部分においてそれらが科学的認識か、あるいはイデオロギー的認識かという区別がなされるのである。科学とちがって芸術や文学に芸術評論や文学評論が存在する理由の一つは芸術的認識や文学的認識の基礎に論理的思惟が働いていることにある。

これらにたいして、宗教的意識形態は幻想的意識をその根源にもつのであるから、それは虚偽意識性が強いといえよう。

## 6 階級社会の発生と階級的イデオロギー

### (1) 階級的イデオロギー一般

いままで述べてきたことは、主に階級的な形態規定をうけていないイデオロギーについてであった。階級社会におけるイデオロギーを考察するためには、これまでの規定では抽象的にすぎることが明らかである。しかし、何故こうした抽象的、一般的なイデオロギー規定について説明する必要があるのか。それは一方ではイデオロギーを階級社会に固有のものとみる見解、イデオロギー一般を階級的なイデオロギーに解消してしまう見解が存在し、他方では階級社会においては階級的イデオロギーの本質を階級闘争の見地から分析することが根本的な問題であるにもかかわらず、それをおこなわず、階級的イデオロギーをイデオロギー一般に解消してしまう見解が存在するからである。抽象的、一般的な規定（あるいは実体規定）を分析するのは、具体的な形態規定の本性を明らかにし、それを一般的規定に解消しないためである。具体的なものは一般的規定と形態規定の総合としてあり、この形態規定の側面こそがまさに具体的なものを具体的なものたらしめているのである。だからこそ、階級的イ

デオロギーを分析するためには——これこそがイデオロギー論の根本的問題である——まずその一側面である一般的な規定が分析されねばならなかったのである。

ここですこし注意しておけば、私のいう一般的規定と形態規定というのは、前者が本質で後者が現象という関係にあるのではない。マルクスは資本主義的生産過程を分析して、それを労働過程と価値増殖過程の統一としてとらえているが、その場合、労働過程も価値増殖過程もどちらも資本主義的生産過程の本質であって、労働過程が本質で価値増殖過程が現象という関係にあるのではない。労働過程は実体（としての本質）であり、価値増殖過程は形態（としての本質）である（この実体および形態というカテゴリーについては『見田石介ヘーゲル論理学研究』第二巻を参照されたい）。この点は一般的なものを分析することの意義について述べたのであって、私のイデオロギー論の方法は直接にこの場合と同じである。

ところで、私は具体的に存在するイデオロギーを抽象的一般的規定としてのイデオロギー一般に形態規定（原始共同体的、諸々の階級のおよび社会主義的な規定）を加えた総合として与え、さらに、これをイデオロギーの機能的側面にたいして、実体的側面として与える。そして、そうした抽象的一般的規定であるイデオロギー一般がその実体としての実践的意識に形態規定を与えられて把握されている。

ところで、1節で引用したマルクスとエンゲルスの史的唯物論の定式は『空想より科学への社会主義の発展』の史的唯物論の定式の最初の部分で、エンゲルスが「これまでのすべての歴史は、原始状態を別にすれば、階級闘争の歴史であった」と述べているように、継起的に発展する社会の歴史的諸段階を分析するための「導きの糸」であり、歴史の発展の原動力が階級闘争にあることを明らかにしたものであった。不破哲三氏はスターリン



の『弁証法的唯物論と史的唯物論』での史的唯物論の定式を「階級闘争の問題がまったく欠落していることを、特徴としている」(『科学的社会主義研究』、二三九ページ)と述べられたあとで、次のような重要な指摘をされている。

「スターリンのこの経済主義的な定式化の背景に、史的唯物論の諸法則を、階級社会にも無階級社会にも共通する基本法則として体系化しようとする志向——それ自体、社会を歴史的発展段階においてとらえることを最大の特徴の一つとする史的唯物論の根本思想とは大きく背離した志向——があつたことは明瞭である。スターリンのこの誤りは、国際的にも、また日本のマルクス主義哲学の理論戦線でも、まだ明確にされたとはいえず、その理論的清算は今後の課題としていまなお残っている」(同前、二四〇ページ)。

ここで不破氏がいわれていることは、スターリンが階級闘争という史的唯物論の根幹ともいべきカテゴリーを欠落させたりえで、どの時代にも、どんな社会にも通用するように史的唯物論を定式化したのであり、こういう意味でのその体系化は史的唯物論の根本思想と大きく背離するということであつて、一般に史的唯物論の基本法則の体系化それ自体を、氏が否定されているのではないと思う。前述の私の用語でいえば、スターリンはマルクスやエンゲルスが定式化した史的唯物論の基本的カテゴリーのなから、抽象的一般的规定に属するカテゴリー(超歴史的で超階級的な規定)をもつぱらとり出して体系化することによつて、それを階級社会にも無階級社会にも共通する基本法則として体系化しようとしたことになる。したがつて、スターリンは形態規定に属する史的唯物論のカテゴリーをその定式から取り去つてしまふわけであるから、そうした史的唯物論では、社会を歴史的発展段階においてとらえることはできず、方法としての意義を失つてしまうことになるのである。

以上のような不破氏の指摘に注意を払ったうえで、階級的イデオロギーの分析に入りたいと思う。

社会が階級に分裂することによって、イデオロギーは新しい規定をうけることになる。階級対立の発生によって、労働は精神的労働と物質的（肉体的）労働に分割される。階級社会は精神的労働と物質的労働の分業に基づく協業の社会であり、精神的労働に従事する支配階級と物質的労働に従事する被支配階級との階級対立、階級闘争をその発展の原動力とする社会である。階級社会においては、現実の物質的労働（生産的实践）から分離し、遊離している精神的労働は二つに分割される。一つは被支配階級の物質的労働を指揮し監督する労働であり、もう一つは本来の精神的労働すなわち自分たちの社会関係についての認識や幻想的意識の所産を生産する労働とに分割される。

精神的労働と物質的労働への労働の分割と、精神的労働に支配階級の一部の成員が固定化することによって、精神的労働に従事する人々は文字を発明し、自然科学的認識を發展させ、芸術などのようなすぐれた独自の形式をもった意識の産物等々を生み出した。こうして人類社会は階級社会に入るとともに、その生産力を飛躍的に増大させ、文明を大いに發展させた。これらの点は階級社会の精神的労働の肯定的側面である。しかし、他方では次のような側面も発生する。

「分業は、物質的労働と精神的労働との分割があらわれる瞬間から、はじめて真に分業となる。この瞬間から、意識は現にある実践の意識とはなにかがったものと、思い込むことが実際にできるし、現実的ななにかあるものかあるものか、なにかあるものを現実的に思い浮かべていると実際に思いこむことができるようになる。——この瞬間から、意識は世界から解放されて、《純粹》理論、神学、哲学、道德等の形成にうつることが

可能になる」(マルクス・エンゲルス、『ドイツ・イデオロギー』、合同出版社、六一―六二ページ)。

ここで若きマルクスとエンゲルスが述べているように、精神的労働に従事する人々は、現実の生産的实践から遊離し、したがって生産的实践のなかで形成されてきたし、形成されている一定の社会関係からも遊離して思考するようになる。

また、階級社会の発生は共同的な社会関係のもとで存在していた社会の全成員の共通利害を、階級的な利害関係に分裂させる。分裂した利害関係をめぐって絶えず発生する階級闘争を支配階級のために抑圧し、調停する「組織された暴力」をもつ国家がここに登場する。また階級社会においては国家によって被支配階級を力づくで抑えておく必要性和ともに、精神的に、イデオロギー的に被支配階級を抑えておく必要性も発生する。支配階級の特権的利害を一般的利害として被支配階級におしつけるためには、その特殊利害を一般的利害として表現するイデオロギーが必要であり階級社会の全成員がこのイデオロギーを実践的規範としてうけとらねばならないのである。

「支配階級の思想は、いつの時代にも支配的思想である。すなわち社会の支配的な物質力である階級は、同時にその社会の支配的精神力でもある。物質的生産の手段をみずからの指揮下におく階級は、それといっしょに精神的生産の手段をも自由に支配しうるのであるから、それにともない精神的生産の手段を欠いている人々の思想は、おおむねこの階級に従属せしめられる。支配的な思想とは、支配的な物質的諸関係の観念的表現、すなわち思想として把握された支配的な物質的諸関係以上のなものでもない。したがってそれは、ある階級を支配階級にするところの、まさにその諸関係の観念的表現であり、その階級の支配的思想である」(同前、九五―九六ページ)

シ）。

従来の共同的社会のなかでは、自分たちの社会関係についてのイデオロギーとイデオロギー的社会関係（社会制度）を社会の全成員が生産的実践の過程のなかで集団的につくりあげてきたのであるが、階級社会においてはイデオロギーを生産する能動的な意識活動は支配階級の一部をなすイデオロギーの専業的活動となる。支配階級の他の部分である専ら指揮・監督労働にたずさわる部分は、「自分たち自身についての幻想の形成をおもな渡世のすべとする」（同前、九七ページ）イデオロギーのつくり出す思想と幻想に受動的にふるまい、生産的活動と生活におわれる被支配階級もこの思想と幻想を受動的に注入される存在に転化される。

一方の極に富み栄える支配階級が存在し、他方の極に貧しい、飢えをしのぐだけの生活をする被支配階級が存在する階級社会のなかで、自らが支配階級の一部であるがゆえに、精神的労働に従事するイデオロギー——彼らはしばしば武装力をもった実際の支配階級である指揮・監督労働に従事する人々に媚びへつらっても支配階級としての現実的利益を守ろうとする——が彼らを支配階級たらしめている彼らの目前に存在する階級対立にもとづく生産関係やその上部構造である社会関係の本質を分析的、論理的思考でもって探求するのは、そうした探求が支配階級の利益に一致するかぎりのことである。支配階級の特殊の利害が社会の一般的利害として受け入れられているがゆえに現実的利益を与えられている支配階級の一員として、イデオロギーたちは現存する生産関係と社会関係をたんに与えられたものとして肯定的に受けとめればよいわけであり、それこそが彼らの存在理由である。イデオロギーが精神的な生産に従事する実践的な動機は支配階級としての社会関係からしか発生しようがないのであるから、彼らが意識に反映する事柄は支配階級として実践的に生活する現実である。イデオロギーが

社会関係に関する事実を取り扱う場合には、その事実は彼らの物質的利害に関係しており、したがってありのままの階級関係にもとづく社会的矛盾（その核心は階級的矛盾である）を彼らがその認識に反映することは、自らの物質的利益の否定につながる事となる。だから、彼らは自らの利益に関わるかぎりでのみ、自らの利益を否定しないかぎりでのみ社会関係の認識にたちむかうことになる。

それと同時に、精神的労働にもっぱら従事するイデオログは生産的实践から遊離して思考する。こうした二つの理由から、すなわち支配階級の階級的立動に立っていることと生産的实践から遊離していることから、科学の任務を客観的事実を分析して意識のうえに反映することであると考えない観念論が必然的に発生する。とくに物質的な経済関係から遠くへ離れた世界観、哲学、宗教、ある種の芸術等においては、観念論的思考が著しくなる。つまり、イデオログたちはすでに与えられている観念材料（既知の諸々の認識材料）を解釈学的意識のなかでつくりかえるのであり、こうして意識の反映的側面が見失われてしまうのである。そして、逆に既成の与えられた観念材料を解釈することが「科学的認識」であると倒錯して考えるのである。現代のイデオログについても事情は同じである。第一章から第三章までに述べたように階級的な学問である経済学の研究分野に解釈学の方法が深く入りこんでいるという今日の研究の現実はこの根本的な原因があるのである。

この解釈学的思考においては、認識の発展の原動力が見失われている。こうして階級社会のイデオログの解釈学的思考によって加工を加えられた、自らの発生根拠を知らない一つの体系的見解としてのイデオロギーが成立することになる。これは本質的に虚偽性をその主要な側面とする虚偽意識としてのイデオロギーである。階級社会における自らの発生根拠を知らない虚偽意識であるイデオロギーとは根本的に異って、それはその発生根拠

を知らないだけでなく、同時に虚偽性を主要な側面とするイデオロギーである（虚偽意識の第二形態）。

次のエンゲルスの文章はこのイデオロギーについて述べているのであり、この文中の「まちがった (falsch) 意識」の falsch は前述の「不明瞭な」(müßerständlich) とは異つて、ことに注意されたい。

「イデオロギーは、たしかに、いわゆる思想家によって意識的におこなわれる過程ですが、しかし、それはまちがった意識で (mit einem falschen Bewußsein) おこなわれます。彼をうごかす本来の推進力は、彼には知られていません。そうでないとすれば、それはまさにイデオロギー的過程ではないでしょう。そこで、彼はまちがった、もしくは仮想的な推進力を想定します。それは一つの思考過程ですから、彼は、その内容をも形式をも、彼自身か、あるいは彼の先行者たちの純粹思考からみちびきだします。彼は、たんなる思考材料だけを運用し、この思考材料を、吟味せずに、思考によってつくりだされたものとして受けとめ、普通は、それ以上すすんで、いっそう遠い、思考から独立した起源にまでさかのぼって研究することはしません。たしかに、これは彼にとつては自明のことなのです。なぜなら、行為はすべて思考によって媒介されるので、究極においても、やはり思考に基礎をもつもののように、彼には見えるからです」(一八九三年七月十四日付けのエンゲルスよりフランク・メーリング宛ての手紙、『全集』第三九卷、八六ページ)。

しかし、すでにのべたように古代の自然宗教の場合には、一定の儀式や幻想はともなつてはいても偽瞞や虚構が重要な役割を演ずることは非常に少なく、また自然的な部族宗教や民族宗教の場合もそれらはその宗教の成立基盤となつた社会関係を多かれ少かれ反映し、それに照応していたのであった。ところが、ここでエンゲルスがいうように、階級社会の成立とともにイデオロギーによって生産される支配階級のイデオロギーは、無階級社

会の諸種のイデオロギーとは違って、それが純粹理論であれ、宗教であれ、道徳であれ、すべてその發生根拠を知らないで、しかも虚偽を主要な側面とする虚偽意識としてのイデオロギーである。

しかし、そもそもイデオロギーはそれが実践的意識であり、実践的な行動基準・行為規範であるということに、その社会的な意味があつたのであるから、現実から遊離した意識の生み出すイデオロギーも現実にたいして能動的にふるまう実践的意識であり、実践的規範でなければならぬ。ところが、現実から遊離した、与えられた観念材料の解釈を仕事とし、現実を反映しないあるいは誤って反映する虚偽意識としてのイデオロギーがどうして実践的意識であり、実践的規範であるのだろうか。

ここで「現実を反映しない」ということの意味はこうである。すなわち、観念的材料を解釈することによって生み出された支配階級のイデオロギーはその観念的材料を生み出したのが現実の経済的土台であり、生産関係であるということを理解しないということ（史的唯物論の未発見とそれがマルクスに発見されたのちにはその無理解）、イデオロギーとイデオロギー的社会關係を生み出し全社会を發展させる原動力が敵対的関係としての生産關係の矛盾にあることを反映しないということである。

いいかえれば、支配階級のイデオロギーはある階級社会の支配階級にとつての肯定的な側面（くり返しの法則の側面）を原理としており、それが経済的土台の変化（この場合の変化は経済的土台の本質的な変化ではなく、ある一定の本質のうえでの変化のことであり、例えば、資本主義から社会主義への変化ではなく資本主義内部での変化ということである）の諸要素をとり入れる場合にはこの原理に照応するかぎりでのみ、従来の体系に合わせてとり入れるのであるから、従来の体系を変更するということはない。支配階級のイデオロギーが虚偽意識でありながら、実践的意識で

もあるのは、ある階級社会の肯定的側面を、それが永久に存立する側面を反映しているからである。

したがって、ある支配階級のイデオロギーはそのイデオロギーそれ自身の実践的規範としての有効性、現実性を否定する側面であり、やがてはそのイデオロギーの崩壊を必然的たらしめる側面である生産関係における敵対的な関係、支配階級と被支配階級の階級的矛盾を絶対に反映することはしない。この矛盾は支配階級の特利的利害がけつして社会の一般的利害ではなく、特利的利害でしかないということを示すのであるから、この矛盾を支配階級のイデオロギーが反映するとすれば、その場合にはそれはもはや支配階級のイデオロギーであることではできないのである。

支配階級のイデオロギーはその特利的利益を反映しているのであるから多数者である、被支配階級の特利的利益を反映していない。そうであるにもかかわらず、多くの人々はどうしてそれを社会の一般的なイデオロギーとして受け入れるのか。これを説明するのに、支配的イデオロギーは教育、宣伝などによって被支配階級におしつけられるのであるといえ、それはなるほど支配階級のイデオロギーが一般化するための一つの理由であることは間違いない。しかし、どんなに強力な手段をもって強制しようとも、被支配階級にそれを受け入れる根拠が全くないとすれば、支配階級のイデオロギーが一般化することはできないであろう。

支配階級は少数者であるにもかかわらず、その少数者の特利的利害を社会の一般的利害として多数者である被支配階級におしつけている。こうしたことが可能でもあり必然であるのはどうしてかということがやはり経済的関係から説明されねばならない。それは次の理由による。

「革命を遂行する階級は、つねにある他の階級に対立しているはずなのに、最初から階級をではなく、全社会



を代表するものとして登場する。その階級は、ひとり支配権をふるう階級と向きあう場合には、社会の全大衆としてあらわれる。その階級がそうなしうるのは、その階級の利害が、従来の諸関係の圧力のために、特殊な階級の特異な利害として自己の利害を展開できなかったからというよりは、むしろ台頭するさいには、その階級の利害が、すべての他の非支配階級に共通の利害と結びついているからにはかならない。この階級の勝利は、したがってまた、他の支配に達しない階級に属する多くの個人にとっても有益である」(『ドイツ・イデオロギー』、合同出版社、九九ページ)。

国家の成立と国家支配を考えるうえで、このマルクスとエンゲルスの見地に私は注目しなければならないと思う。支配する階級と支配される階級の利害の対立を全く切り離してしまい、支配する階級の特異な利害は支配される階級にとって全く無縁のものであると考えるはならないのである。一般的なものは特異的であるからこそ一般的なものであって、一般と特殊の矛盾はその一側面においては相互に前提しあっているのである。例えば、資本と賃労働は相互に前提しあうとともに、否定の関係でもあり(この全体が資本と賃労働の矛盾)、この相互前提の關係からみれば資本の特異な利益は資本家階級と労働者階級を含めた社会全体の利益であり、資本と賃労働の否定の關係からみれば、資本の特異な利益は社会の一般的利益ではない。これが資本主義的生産様式において、その最初から最後まで存在する基本的矛盾である。

しかし、非常に一般的にいうと、ある階級社会がその上昇期にある間は、その生産關係が生産力に照応している間は、生産力の發展は被支配階級にも相対的に利益を与え、自分たちの經濟状態が相対的に改善されていくという意識を与える。この意味で旧来の階級社会にかわって新しい階級社会が登場した場合に、ある期間、矛盾関

係の一面面である相互前提関係が相対的に社会の前面に出て、全体の関係のなかで精神的生産の手段をもたないで実践的に生活する被支配階級の人々にとっても意識されやすい側面になることは否定し難い事実である。もちろん、この相互前提関係が社会の前面に出ているからといっても、それは支配・被支配、搾取・被搾取の関係の一面面であって、これらの関係が相互に前提しあう永遠の調和の關係に転化してしまうわけではないのであるから、支配階級は一方では、自らが支配する階級社会が永遠の自然必然的な社会、永遠の調和の關係にある社会であることを示す体系的見解としての階級的イデオロギーを用いて、被支配階級を偽瞞しなければならぬし、他方では階級矛盾から生じる諸矛盾を調整したり、あるいはそれをいつでも国家権力でもって力づくで抑えこむ用意がなければならないのである。

ただし、奴隷制的生産關係の場合には、事情は異っている。家父長制的奴隷制や奴隷制大經營のもとでみられる奴隷は「小經營を行わず、奴隷主あるいはその代理人の鞭と監視のもとに使役され」(中村哲『奴隷制・農奴制の理論』、一〇五ページ)ているのであるから、これらの奴隷制の場合には、暴力的な抑圧によって奴隷制的關係が維持されるのである。この關係を維持するのにイデオロギー的手段はその役割を果さないというのがこうした奴隷制の基本的側面であり、生産力の發展は直接に奴隷に利益をもたらすものではない。しかし、「同じく奴隷制であっても奴隷が小經營を行ない、労働過程においては奴隷主から独立している土地占有奴隷制」(同前)の場合には、資本・賃労働關係と同様のことがいえるのである。また、アジアにおけるいわゆる一般的奴隷制(algemeine Sklaverei)の場合も後者の場合が妥当する。

以上のことから、支配階級のイデオロギーを虚偽意識という場合に、この虚偽意識という意味はこうである。

第一に、虚偽意識は全面的に誤っているから虚偽とよばれるのではない。すでに述べたように例えば、現代の支配的イデオロギーである「労資協調」的イデオロギーは現実を全面的に誤って理解しているのではなく、資本家と労働者が相互に依存しあいながら同時に矛盾し敵対している関係のなから、その一側面である労資の相互依存、あるいは相互依存から発生する個人や集団に対する特殊的利益の側面だけをいうイデオロギーであって、そのかぎりでは事柄の一面をとらえているのである。およそイデオロギーが全面的に虚偽であるならば、現実を主導する実践的な行動指針としての意味をもたないであろう。

だから、階級社会における虚偽意識としてのイデオロギー（虚偽意識の第二形態）は第一に、イデオログたちの生産する意識がどんな社会関係のどういう側面から発生するのかを説明しない意識のことである。第二に、それは自らが何を原動力として生み出されたかを説明することができない意識のことである。第三に、それは支配階級の階級的利益、すなわち現実の矛盾のうちの現状を肯定する側面を反映することによって現実の発展をおしとどめようとする実践的な意識である。原始共同体社会の諸々の実践的イデオロギーが基本的には経済的土台に照応し、その発展をおしすすめるように作用していたのにたいし、支配階級の階級的イデオロギーは経済的土台の一面しか反映せず、生産力と生産関係が照応しなくなるとともに経済的土台の発展を阻止するように作用する。両者とも同じ実践的イデオロギーではあるが、その内容は根本的に異っているのである。

(d) 国家とイデオロギー

- (1) ここでの課題は国家論を全面的に展開することにあるのではなく「国家とイデオロギー」という主題にか

かわるかぎりで国家について述べることをはじめにことわっておきたい。

階級の発生はまた国家の発生でもある。被支配階級を暴力的に抑圧するための武装機関(国家の物質的基礎)をその中軸にもち、法律的諸制度と政治的・法律的イデオロギーあるいは国家イデオロギーという衣裳をまとい、国王あるいは僧侶等々の為政者に代表されて歴史の舞台に国家は登場する。

以下、とくに典型的な形態で国家が成立したアテナイを念頭において述べていきたい。国家成立直前にアテナイ社会はすでに次のような発展段階に達していた。この発展段階の特徴は、第一に戦争の捕虜を生かして労働力として使用できるだけの生産力段階に達していたこと、第二に、アテナイを含む諸共同体が時には戦争や征服に至るような相互作用をおこなっていたこと、第三に、原始共產主義的な伝統にもとづく氏族制度の諸機関——評議会、民会、バシレウス(軍統師者であり、軍事的職権のほかに神官および裁判官の職権をもつ)／＼エンゲルス、『起源』、『全集』第二二巻、一〇六一—一〇九ページ参照——が上部構造として存在していたこと、第四に、戦争の捕虜が奴隷となることよって自由民と奴隷との階級対立が発生していたこと、第五に、共同体的基本関係(労働と労働の客観的諸条件の本源の統一にもとづく経済関係)がアテナイ社会の基本的な経済原理となりながらも、そのうえに商品・貨幣経済が広汎に展開しており、また土地の私的所有も発展していたこと、である(以上、拙稿『社会的共同業務』と国家(上)、『立命館経済学』第二九巻六号、九八一—一〇四ページを参照されたい)。

この第三点としてのべた、イデオロギー的社会関係である原始共同体的原理にもとづく氏族制度の諸機関(原始共同体的生産関係に照応する上部構造)は原始共同体末期にはすでにその土台に照応しなくなっていた。生産力の発展は共同体的基本関係のみ立脚する経済関係を至る所でほり崩していき、一方では私的所有にもとづく商品

・貨幣經濟關係が發展し、他方では、より基本的な過程として奴隸を生産に用いる經濟關係が發展してくる。こうした經濟關係と生産力の發展が氏族社会の成員たちを富める者と貧しい者に分裂させる。国家成立直前のギリシャ社会では氏族のなかに富者と貧者の、債権者と債務者の対立・矛盾が存在し、さらに氏族成員と導入された奴隸の対立・矛盾が存在し、それらは激化しつつあった。また、こうした各共同体社会は交易や略奪や、時には戦争にまで転化するような相互作用をおこなっていた。

奴隸制的原理にもとづく階級社会は原始共同体である氏族社会の内部的要因のみから生まれたのではない。氏族社会が一定の生産力段階に達した場合に、対外的な戦争（諸民族共同体社会の相互作用）の捕虜が奴隸に転化し、その後、戦争や対外的な交易によって奴隸が入手される——交易品として人間を扱かうというのは人間の略奪であり、やはり戦争が前提されている——のである。奴隸が氏族社会に入りこむことは明らかに氏族社会の生産力を上昇させ、他方で旧来の生産關係（原始共同体的生産關係）と新しい生産力および新しい生産關係（奴隸制的生産關係）との間の矛盾を生み、それを激化させた。旧来の共同体的原理にもとづく經濟的土台に照応している上部構造はこの新しい經濟關係を統括できなくなるのである。これが国家の發生の第一の理由である。

また、ものをいう動物としての奴隸はそれを従順に従わせておくためには一定の抑圧装置を必要とした。ギリシャ・ローマの氏族社会に奴隸が導入された結果、共同体的原理に立脚する氏族共同体の機関はすでに古くなり、奴隸を抑圧する装置・機関としては不適合なものであることが明らかになっていった。ここに共同体の機関が国家に転化しなければならぬ第二の理由があった。

共同体の機関が国家に転化しなければならぬもう一つの理由はこうである。氏族社会の成員のなかに富める

者と貧しい者の対立が発生すれば、ここから生じる争いの調停機関としては旧い氏族社会の機関はもはや役に立たなくなっていた。しかし、奴隷階級にたいして、旧来の氏族社会の成員は自らの争いをのりこえ調停し、支配階級として成長しなければならなかった。ここに国家が必要とされるようになる。アテナイの国家は旧来の氏族社会の貧しき部分、債務者を救済し、貧富の対立から発生する敵対的利害を調停する。この調停は私的所有の放任の結果、アテナイの市民が没落して奴隷に転化することを防ぐのが目的であった。市民の多くが没落することは発展してくる私的所有と奴隷制それ自体にとって危機であった。なぜなら、没落した市民が反乱し、奴隷の反抗と合流すれば私的所有も、また私的所有の基礎でもある奴隷制、したがってすでに奴隷制と私的所有がその経済的基礎となりつつあったアテナイ社会自体が存亡の危機にたたされることになるからである。

債務者や貧しい人々の救済は私的所有の効力の一時停止によって私的所有をまもることであった。私的所有と奴隷制をまもり発展させるためには、アテナイの市民を支配階級として結束させねばならなかった。しかし、こうしたことを旧来の共同体の機関がやれるはずはなかった。ここに私的所有と奴隷制をまもり発展させ、アテナイ市民を支配階級として成長させ団結させるための機関として国家が成立するのである。これが国家発生のものである理由である。

こうして、「氏族制度の諸機関の一部は改造され、一部は新しい諸機関の割りこみによって排除されて、ついには新しい国家官庁によって完全にとつかわられ、また他方では、各自の氏族、胞族、部族によって自衛するほんとうの『武装した人民』に入れかわって、これらの国家官庁に奉仕し、したがって人民に対抗して使用することもできる武装した『公的強力』が現われ」（エンゲルス、『起源』、『全集』第二二卷、一一一ページ）てくるのであ

る。

この場合、注意すべきことはここでエンゲルスが述べているように、新しい上部構造である国家は旧来の上部構造を投げ捨てて、全く新しくつくられたのかといえはそうではなく、新しい要素をも加えながら旧来の上部構造を改造したという点である。これは歴史の一般法則であって、革命によって生まれた新しい支配階級は旧来の国家を改造して、あるいは徐々にあるいは急速に自己の支配に適合的な国家をつくり出す。

(2) 以上に、簡単に典型的な国家成立の形態と、国家の概念を概略的に考察したわけであるが、それでは国家とイデオロギーの一般的な関係はどのようなものであろうか。

まず第一に国家の成立過程あるいは国家の交替の場合におけるイデオロギーの役割である。これについてエンゲルスは次のようにいう。

「もし富にたいする貪欲が氏族員たちを富者と貧者とに分裂させていなかったなら、『同一氏族の内部における財産の差が、氏族員の利害の一致を転じて彼らのあいだの敵対に変え』（マルクス）ていなかったなら、また奴隷制の拡大の結果、働いて生計の資を獲得するのは奴隷にのみふさわしい活動で、略奪よりも、恥ずべきことだとすでに見なされはじめていなかったなら、こういうこと（国家の形成のこと——筆者）はけっして起こりえなかつたろう」（傍点は筆者、『起源』、『全集』第二巻、一六四ページ）。

この引用文の傍点をふった部分に明瞭に述べられているように、支配階級として上昇すべき階級のなかに、イデオロギー的に新しい階級社会の理念——この場合には、来るべき社会において彼らは精神的労働、すなわち労働の指揮・監督、司法、国務、科学に従事すべきであるとする理念と、この理念が新しい社会の原理になるべき

であるという理念——が芽ばえ発展し、そうした理念によって先導もされ、媒介もされて奴隷制国家が成立したということである。これもまた歴史の一般的法則であり、古い階級国家に代わって、新しい階級国家やまた国家それ自体の廃止を究極の目的とする国家(社会主義国家)、あるいはまた同じ階級国家という同一性のうえて交替する形式だけ異なる国家等々が登場する場合にもイデオロギーは同様の役割を果すのである。以上が国家とイデオロギーに関する第一のことである。

第二に、(i)で支配階級の特殊の利害がどうして社会の一般的利害として受けいられるかということについて説明したのであるが、これを「国家とイデオロギー」という見地からみれば、それは同時に支配階級の階級意思が国家意思とし一般化することの理由でもある。もし、支配階級と被支配階級がその利害関係において、ただたんに相反するだけであり相互に前提しあうということがなければ、支配階級はその特殊の利害を虚偽意識としての階級的イデオロギーでもって一般的利害であると表明して、それからそうしたイデオロギーを被支配階級と社会にたいして外から強制的におしつけなければならぬし、またその階級意思を国家意思として被支配階級に無理やりに受容させなければならないことになる。しかし、こういう無理や強制によって社会や歴史の法則性を説明することは絶対にできない。経済的關係のなかに、合法的に支配階級の特殊の利害が社会の一般的利害として貫徹する側面が存在するのであり、だからこそこうした経済関係の上部構造への反映として、支配階級の特殊な階級意思が一般的な国家意思としてあらわされるのである。そして、ある階級社会の生産関係がその生産力と照応しなくなり、その階級社会の歴史的使命が終った段階で、支配階級の特殊の利害を社会の一般的利害として受けとることを拒否する被支配階級の意識が現実性を帯びるようになり、それが階級闘争に反映され、階級闘争



はたんに経済的利害関係をめぐる争いから、それに加えて上部構造全体の変革を追求する闘争へと転化発展する。こうした段階では、支配階級の特殊の階級意思を一般的な国家意思として受けとることを拒否し、その拒否を階級闘争と革命によって現実化する必然性も生まれてくる。

ところで、ここで私が述べたことは藤田勇氏の注目すべき業績である『法と経済の一般理論』や「国家論の基礎的カテゴリー」（『現代と思想』第一八号）においてはどうも明確になっていないように思われる。そこで、この点に限定して藤田氏の見解をすこし検討してみよう。

氏は支配階級の階級意思が公的意（国家意）としてあらわれていることについて次のように確認されている。「こうして、国家が公的権力としてあらわれるかぎりにおいて、国家をつうじて表現される支配階級の階級意（公的意）として、社会の成員全体にとって共通な、あるいは平均的な意（目的設定・行動制御的意識）、すなわち、『一般意』（*volonté générale*）としてあらわれることになる。逆にいえば、支配する階級がそれをつうじてみずからの利害を社会の全成員の共同利害としてかかげ、みずからの意（支配階級の共通意）に普遍性の形態をあたえるものであるがゆえに、国家は公的権力としてあらわれるのだ、といってもよい」（『法と経済の一般理論』一二六ページ）。

藤田氏は、このように国家が公的権力としてあらわれる（*erscheinen*）かぎりにおいて、支配階級の階級意（公的意）としてあらわれているという事実を確認されているわけであるが、しかしそれではどうして、なぜ、少数者の意（支配階級の階級意）が社会の一般意としてあらわれるのか。この「なぜ」を説明することが、この藤田氏の引用文が含まれている節の表題である「階級意の公的意への転化の論理」ということである。

つまり、「転化の論理」というのは、なぜ被支配階級が少数者の意思を受け入れるのかということを示す論理でなければならぬ。氏がいわれるように、国家や法律は当然に経済的諸関係の反映であるのだから、経済的諸関係のどんな法則が、あるいはどんな側面が被支配階級に支配階級の意思を受け入れさせるのかというその論理が示されなければならない。もし経済的諸関係のなかにこういう法則や側面がないとすれば、国家や法律は無理やりに、外的強制として被支配階級に与えられなければならない。この場合に機能する国家や法律、あるいはそれに付随するイデオロギー(狭い意味での)は全くの虚偽であり、被支配階級が受け入れる根拠を全くもたないにもかかわらず、教育やイデオロギーの宣伝のなかで強制的に与えられ、そして受容されているものと考えねばならないであろう。

ところで、藤田氏の「階級意思の公的意思への転化の論理」は「法意識」を媒介にした、虚偽意識としてのイデオロギーを外的強制によって多数者におしつけるというものである。氏は次のようにいわれる。

「いま問題にしている法意識が、公的強制によって万人を拘束する普遍的規模を志向することを固有の属性とするものとすれば、その形成のためには特殊利害・特殊意思(階級利害・階級意思)の『超克』というイデオロギー的転倒が不可避である。この『超克』⇨転倒によって、階級意思は『秩序』、『公正』、『福祉』等の超階級的⇨超歴史的イデオロギーの衣をまとうことになる。さきに見た代表制機関における公的意思の成立(立法)のプロセスにおいて登場する階級意思は、すでにこうしたイデオロギーの衣をまとっているそれであって、階級利害の生のままの主張ではない」(同前、一三二ページ)。

この藤田氏の主張は支配階級の特殊利害が被支配階級の利害に一致するものではないという側面からみれば、

正しいことである。しかし、この「特殊利害の『超克』というイデオロギー的転倒」が、特殊の利害が一般的利害でもあるという階級矛盾の一面である相互前提的關係のうえに立脚すること、したがって、こういう經濟的關係のうえで支配階級の階級意思が國家意思に転化することをみなければやはり不十分である。法が超階級的な装いをこらすことは、被支配階級がそれをうけいれるための一条件にすぎない。また、生産力が上昇するかぎりでは、それがすべての階級にとって利益になるというだけでも不十分である。以上のような不十分性を藤田氏の主張はもっていると思うのであるが、氏の主張の全面的な検討はまた別の機会におこないたい。

第三に、社会の一般的意志ではない支配階級の階級意思が國家意思としてあらわれているのであるから、國家はやはり「幻想の共同体」である。これが「國家とイデオロギー」の第三の問題である。『ドイツ・イデオロギー』では次のようにいわれている。

「従来の共同社会の代用物、すなわち國家等々においては、人格的自由は、支配階級の生活諸關係のうちでそれだけの諸個人にとってのみ、そしてまさに、かれらがこの階級に属する諸個人であったかぎりにおいてのみ、存在したにすぎない。いままで諸個人がそこへ結集していた擬制的共同社会は、いつでもかれらから離反して、かれらに対立していた。しかも同時に、それはある階級の他の階級に対する団結であったから、被支配階級にとっては、それはただたんにまったくの幻想的共同体であったばかりでなく、ひとつのあたらしい桎梏でもあった」

(傍点は筆者——『ドイツ・イデオロギー』、合同出版社、一三七—一三八ページ)。

國家は同時に実在的なものとして、すなわち、軍隊、警察、裁判所、刑務所、議會、諸官庁等々として実在的に存在する。古代においては、巨大な墳墓、装麗な宮殿(イデオロギー的シンボル)等々として実在した。こうし

た実在的なものは成立すると同時に人々のイデオロギーを支配する。国家は、現象する姿においてはその発生の由来、その本質を隠蔽しているのであるから、精神的労働に従事しない、したがって科学的認識によってその本質を分析する余裕をもたないで経済的、社会的生活をおくる被支配階級の人々は国家の本質を把握することなく、国家を実在的な所与としてうけとめてその実践的な意識を形成する。国家を実在的な現象する姿においてとらえる人々にとっては、具体的に実在する国家があるからこそ自らも存在するのであると思ひこむ。王が存在するから、臣下が存在するのだという逆立ちしたイデオロギーが人々をとらえるのである。こうして、支配階級の特殊の利益を守る機関である国家が、「幻想の共同体」として人々のイデオロギーを支配するのである。

したがって、国家は成立と同時にイデオロギー的な力として人々を支配する。これが「国家とイデオロギー」の第四のことである。

「国家という形で、人間を支配する最初のイデオロギー的な力がわれわれにたいして現われる。社会は内外からの攻撃にたいしてその共同の利益を守るために、自分のために一つの機関をつくりだす。この機関が国家権力である。この機関は発生するやいなや、社会にたいして自立するようになる。しかも、一定の階級の機関となり、この階級の支配権を直接に行使するようになればなるほど、いよいよそうなる」（エンゲルス、『フォイエルバッハ論』、『全集』第二二巻、三〇七ページ）。

この引用文を理解するうえで注意しなければならないのは、国家すなわち階級社会において、はじめてイデオロギー的な力があらわれる、とエンゲルスが述べていることから、イデオロギー的な力は階級社会にのみ固有のものであると考えるはならない。「人間を支配する」という言葉は階級的な意味で、支配階級が被支配階級を支

配するというのである。人間はいつの時代でも実践的規範意識としてのイデオロギーに拘束され、それに従って行為するのであり、この意味で人間はイデオロギー的な力によって支配されているのである。しかし、エンゲルスがいうのはこの意味ではなく、被支配階級を支配する階級的イデオロギーの最初の形態が国家であるということである。

国家の本質は被支配階級を抑圧しておくための、暴力装置であるとともにイデオロギー的装置でもあるということがここで確認されねばならない。レーニンの時代のロシアと違って、むき出しの暴力的抑圧が前面に出ていない高度に発達した資本主義国の今日の現実における国家を考える場合に、国家がイデオロギー装置でもあるということの確認は階級闘争にとって欠かすことのできないことである。したがって、国家がイデオロギー装置として機能している客観的機構や諸制度を具体的に分析することが国家論の不可欠の課題であろう。ここではこの点の指摘だけにとどめておこう。

#### (ハ) 社会関係の「物化」と支配階級のイデオロギー

次に、資本主義的社会関係において固有なものである社会関係の物神化が資本主義的イデオロギーに反映することについて述べたいと思う。

資本主義社会は全面的に発達した商品生産社会であり、資本主義的生産関係の理解は商品生産関係の理解が一つの前提となっている。この商品生産関係においては、商品生産者たちの私的諸労働の社会的関係は、「諸個人が自分たちの労働そのものにおいて結ぶ直接に社会的な諸関係としてではなく、むしろ諸個人の物的な諸関係お

よび諸物の社会的な諸関係として、現われるのである」（『資本論』第一卷第一分冊、九九ページ）。生産における人と人との関係は商品生産関係においては背後に隠れており、商品生産者は自分がそのなかで労働する社会関係はあるがままのものとしては、諸物の社会的関係として、物と物との関係として現われている。商品の完成形態である貨幣は、「私の諸労働者の社会的諸関係をあらわに示さないで、かえってそれを物的におおい隠すのである」（同前、一〇二ページ）。

こうして人々は商品社会においては、生産関係の「現実性とは違った幻想的な姿」（同前、一〇三ページ）にとられてその社会的生活をイデオロギー的に送ることとなる。資本主義は全面的に発展した商品生産社会であるのだから、この「幻想的な姿」が社会の隅々にまでいき渡っている。したがって、この点に関しては、支配階級のイデオロギーはこの幻想的な姿を眼に映すがままに反映すればその階級的任務を果たしたということになるのである。経済関係の現象する姿こそ「ブルジョア経済学の諸範疇」（同前、一〇二ページ）をなしているのである。

しかし、同じ階級社会であっても奴隸制と封建制とは、そしてまた無階級社会は資本主義社会のように物神性で覆われておらず、それよりもずっと透明で合理的である。奴隸制にとっては自己の社会経済的境遇が何に由来するかは自明のことであり、農奴にとっては自己の剰余労働が誰れの手の中に入るかは自明のことであった。だから彼らはいわば自然発生的に奴隸反乱や農民一揆に訴えて、その経済的関係から逃亡しようとしたり、それを変革しようとしたのである。しかし、こうした反乱や一揆がイデオロギーぬきにおこなわれたのではないということ、原始キリスト教の歴史が示すところであり、また農民一揆がしばしば宗教的色彩に彩られていることから

明らかであろう。

このような意味で、ブルジョア・イデオロギーが最も虚偽意識性の強いものであり、したがって、イデオロギー闘争を含むブルジョア社会の被支配階級の階級闘争は科学的認識を基礎としてしか闘えないということがいえるであろう。

## (二) 階級闘争とイデオロギーの分裂

原始共同体社会においては、社会関係の諸側面に対応して発生する諸イデオロギーはそれぞれ、その生産関係に規定されてその内部に分裂をもたない一重のものであった。

しかし、階級社会の発生と階級闘争はあらゆるイデオロギーを支配階級の立場にたつものと被支配階級の立場にたつものとに分裂させる。生産関係から発生する経済的利害をめぐる闘争は上部構造のあらゆる側面に反映され、社会の諸領域の全側面において支配階級のイデオロギーと被支配階級のイデオロギーが闘うこととなる。こうした階級闘争は生産力と生産関係が相対的に照応しているかぎりにおいては社会の前面にでてこないかもしれないが、やがて生産力と生産関係が照応しなくなるとともに、階級社会の発展の原動力である階級闘争が社会の前面にあらわれでてくる。被支配階級においては、彼らの特殊の利害の追求が同時に社会の発展に合致している。したがって、現象的事実にとられることなく、その本質を分析する科学的認識が明らかになることが受け入れられるのは、その階級的立場が社会の発展と合致している被支配階級の立場である。前述したように、その社会関係が透明でない資本主義社会においては、経済的利害関係を軸点として階級闘争を闘う労働者階級にとっては、

最高度に虚偽性をもつ支配階級のイデオロギーと闘うために、その実践的意識としてのイデオロギーに科学的認識を注入することが要求されるのである。

今日の社会科学は階級闘争を原動力として発展する社会関係を反映しなければならないのであるから、その科学性は実在的な諸関係の全面的分析を要求する労働者階級の階級的立場にたつてこそおこないうるのである。現実を分析しない今日の解釈学的思惟は、この意味でブルジョア的な虚偽意識といえるであろう。

科学的認識の場合と同様に階級闘争は、政治的、法律的、芸術的、道徳的、哲学的イデオロギー等々において、現実を科学的に反映するイデオロギーと現実を虚偽的に反映するイデオロギーとにそれを分裂させるのである。

## おわりに

以上で、「経済学史の意義とその方法」と題する拙論をおえることとなる。経済学史の研究というのは、経済学という現実の経済的諸関係を研究する学問の一分野であるけれども、しかしその直接の対象は現実の事実ではなく、経済学の認識史であると考えられてきた。どのような学問分野においても、この認識史を対象とする研究が必要ではあるが、この認識史（あるいは人類の認識そのもの）が人間の意識によって反映されるべき対象となつたのは、拙論の第四章「イデオロギーとは何か」で述べたように、階級社会において精神的労働が分化した時であつて、この領域にはもつとも観念論が入りこみやすいのである。一見すれば、経済学史の研究は経済学の研究の一分野であるから、経済的土台からもつとも離れたところに存在する哲学などの研究と違って、現実的な事実と密接に関係しなければ成り立たないような学問にみえるのであるが、しかしやはり経済学史の研究が認識史を直



接の対象として研究するということから、それは哲学などに典型的にみられる解釈学的研究と非常に共通する側面をもつ。すなわち、それが現実的な経済的事実の研究とどんな関係をもっているのかということが方法的に確立されていなければ、あるいはその研究の発展はどのようにした場合におこなえるのかを方法的に確立していなければ、結局、経済学史の研究は既知の経済学の認識史の範囲を一步も出ることができないのである。

スミス、リカードウ、マルクス等々の既知の経済学的認識の追認識にとどまっているかぎりにおいて、どうして科学の発展がありえようか。経済学史の研究が既知の認識の範囲にとどまるといふかぎりでは、それは埋れた資料（未発見の経済学者の文献）の再発掘によって認識史をすこしばかり豊かにする——これはそれ自体では科学研究の予備作業として一定の意義をもつ——か、あるいは既知の認識を再解釈する以外にはない。しかし、この再解釈は個人の趣味としておこなわれるならば何の意味ももたないであろう。再解釈が意味をもつのはまさに、それが現実の未発見の法則の解明へとつながっているからである。したがって、未発見の法則を発見する予感——これはやはり現実的事実の研究によってしかおこなえない——なしに、どうして現実的意義をもつ既知の認識の再解釈をおこなえようか。

思想的的方法による経済学史の研究は、既知の認識内部にとどまる解釈学的な研究方法に一つの疑問を提出したものであった。その点においては、この方法は一定の意味をもっていた。しかし、この思想的的方法による経済学史研究も結局のところは、化粧なおしをした解釈学でしかなかった。この方法による研究は、「市民社会」や「分業史観」というイデオロギー的素材でもって古典を再解釈しようとするものであるが、この「市民社会」や「分業」というカテゴリーはそれ自体が科学によって研究されて始めてその内容が理解されるイデオロギー的

なものである。この方法は、古典の「分析手段」として、あるいはその再解釈の手段としてイデオロギー的素材を用いるのであるが、それがけっしてイデオロギーではなく、科学的なカテゴリーであるというならば、この方法はそれこそ現実を、今日の日本資本主義を具体的に分析することによってそれを示さなければならぬであろう。しかし、この方法においてはこういう問題意識は全く感じられないのであるから、この方法によって古典を再解釈（イデオロギー的立場からの再解釈）すれば、古典すなわち既知の認識が科学的であればあるほど、その再解釈はますます古典の科学性を失わせた解釈となるのである。したがって、それは虚偽意識としてのイデオロギーということになる。

この拙論は具体的にこの思想史的方法による経済学史の研究を分析していない点で不十分であり、また宇野説における「科学とイデオロギー」やアルチュセールのイデオロギー論（イデオロギーの機能的側面）について述べていない点で不十分であるが、この点については近刊予定の拙著『経済学とイデオロギー』（有斐閣）のなかで果したいと思っている。

最後に、結局この拙稿は科学的な経済学史の研究のための「導きの糸」を与えたものであり、今後はこの「導きの糸」にしたがって具体的な現実の分析のために、それと有機的な連関をもった学説史の研究をおこないたいと思っている。（完）